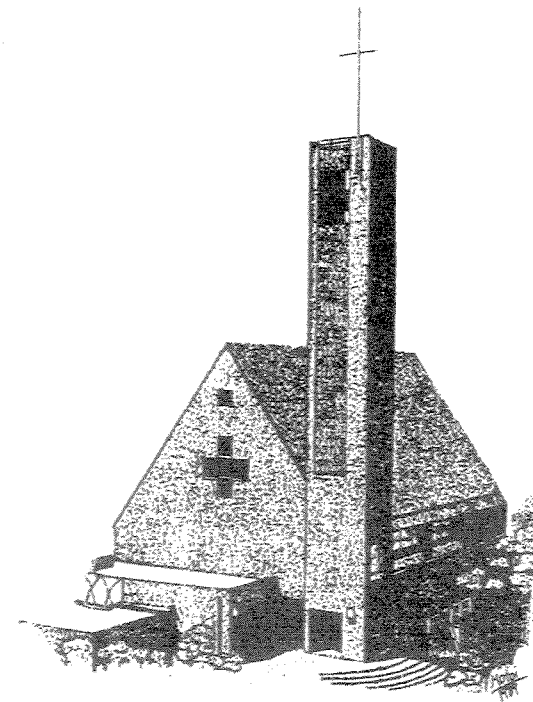


チャペル ブックレット No.12

絵本のちから

松居 直



名古屋学院大学 宗教部

絵本のちから

☆絵が語る

私は編集者として、また出版者として長い間仕事をしてきました。今日は絵本のお話をいたします。

絵本は言葉の世界です。絵本の中には二つの言葉があります。文章と絵です。みなさんは絵本の中の文章をお読みになると思いますが、子どもは絵を読みます。特に小さい子どもは字が読めませんから絵を読むのです。絵は全部言葉なのです。言葉を絵にしたのです。子どもはその絵の中の言葉を全部読み取っているのです。そして物語を追っていきます。

私は若いときから編集者でしたから、まだ子どもが小さかった時に、よく外国の絵本を家に持って帰りました。それはロシア語だったりスウェーデン語だったり、もちろん私は全然読めないのですが、子どもたちはそれを喜んで見ていました。今でもよく覚えているのは、ある日、私を持ち帰りましたハンガリー語の絵本を、子どもは熱心に見ていました。そしてしばらくして本を抱えてきて、私に「これはこういう話だよ」とストーリーを話すのです。私は最初から、まず字が読めないのだからわからないと決め込んでいますので、子どもに「今度、ハンガリー語の先生に聞いておくれ」と答えました。後日、もう亡くなられましたがハンガリー語の大家、徳永康元先生にお尋ねしたところ、それはかなりピタリと子どもの話したストーリーと合っていました。子どもは絵を読んでいたので、それもかなり深く読んでいたのです。

私たちが絵本を読むとき、まず大切なのは絵を読むことなのです。私たちは字が読めますからサッと文章だけを読みがちです。それでわかったような気がしますが、それでは絵本の入り口に立っただけです。絵のほうに豊かな物語が語られていることが多いのです。文章にないことも絵に語られていることがあるのです。

バージニア・リー・バートン (1909-68) の『ちいさいおうち』という、私が大好きな本があります。これが日本で出ましたのは1953年の12月でした。岩波書店が「岩波子どもの本」というシリーズで出されたうちの一冊でした。私はその時まだ絵本を編集していませんでしたが、本屋さんでその素晴らしい小型の翻訳絵本を手に取りビックリしました。『ちいさいおうち』は文章よりも絵のほうはずっとよく物語っていたのでした。

私は少しアメリカ史を勉強していましたので、見てすぐ、そこには19



松居 直 氏

1926年京都市に生まれる。1951年同志社大学法学部卒業。1952年福音館書店創業に参画、1968年編集部長より社長、1985年会長、1997年相談役に就任、現在に至る。1965年絵本『ももたろう』でサンケイ児童出版文化賞受賞。1993年第28回モービル児童文化賞受賞。国際子ども図書館を考える全国連絡会会長、ユネスコアジア文化センター評議員。

著書に絵本『びかくんめをまわす』『だいくとおにろく』『桃源郷ものがたり』（福音館書店）ほか、『絵本とは何か』『絵本を読む』『絵本の現在 子どもの未来』『絵本の森へ』（日本エディタースクール出版部）、『絵本・ことばのよろこび』『子どもの本・ことばといのち』

（日本キリスト教団出版局）、『絵本のよろこび』（NHK出版）、共著に『子どもと文学』『にほんご』（福音館書店）、『絵本の力』（岩波書店）などがある。

世紀末から20世紀初期のアメリカの社会史と思想史が書かれていることを発見しました。そして絵本というものはこんなことまで表現できるのかと驚きました。たとえばこの本では「ちいさいおうち」がポツンと一軒だけ建っています。その頃のヨーロッパや日本の村では、家は何軒か塊って建っていて、そこから村の細道をたどって畑に行き、そこで働くという生活でした。アメリカでは農家は全部孤立しているのです。テレビドラマにもなった「大草原の小さな家」という物語がありますね、まさにあんな感じです。農家があのよう孤立しているというのは、日本人には理解できないことですが、19世紀にできたアメリカの農地法では、農業をする人々は耕している農地に住まなければ所有権を持っていません。ですからあのよう一軒一軒離れて家が建っているのです。それが見事に絵本の絵の中に描かれているのです。あの絵本ではだいたい文章の三倍くらいなのがさし絵に描かれています。絵をちゃんと読まなければバージニア・リー・パートの意図はわからないわけです。

私は彼女にお会いしたことがあるのですが、彼女は社会的な問題、科学的な問題、思想的な問題に非常にはっきりした見解をもっていらっしゃる方でした。彼女の父上はマサチューセッツ工科大学の初代の学長でした。父上からの影響もあるのでしょうか。アメリカ社会の発展があの絵本の中にちゃんと表されているのです。それで私は物語絵本というものの可能性をとて強く感じたのです。

そのあと1956年に私は毎号一つの物語に一人の画家が挿絵を描くという月刊絵本「こどものとも」を創刊することになりますが、その大きなヒントを与えてくれたのが「岩波の子どもの本」シリーズであり、バージニア・リー・パートの『ちいさいおうち』であり、さまざまな外国の物語絵本でした。

『ちいさいおうち』の翻訳絵本が出たときも、私はすぐに原書を取りよせました。そしてそれを家に持ち帰りますと、さきほど申しましたように英語のわからない子どもがたいへん熱心にその絵を見て、絵を読んでいるのです。絵が物語を語る力を知った次第です。

絵本の中にはかわいらしい絵が多いのですが、妙にかわいらしい絵はちょっと「まゆつば」だなあと感じることもあります。かわいらしいのも悪くはないのですが、かわいらしいだけ、というのは困るのです。恐い絵とかグロテスクな絵とか単純な絵にも美しさはあるのだということも子どもに伝えたいのです。

☆絵本の歴史

私は日本美術も好きでして、少年時代、京都にいましたので京都、奈良はもう隅々まで歩き尽くしたといってもいいでしょう。日本にはその時代その時代に独特な「美」があるのだということはそのとき悟ったのです。私たちはその日本の美を次の世代に伝える義務があります。絵本に与えられている使命はいくつかありますが、それも一つの使命だと思います、そういう絵本を作りたいと思ったのです。同じように外国にある美しさ、楽しさも翻訳して日本の子どもに伝える絵本を出版したいと思ったのです。

1962年にドイツ、フランクフルトであった世界最大のブックフェアに日本は初めて参加し、自分たちが作った本を世界中の人々に見ただく機会を与えられました。それまで日本の出版界では外国の絵本を翻訳して出版するという事は行われていたが、国際的な活動はしていませんでした。私も一番若いメンバーとして加えていただき、編集した絵本をもっていきました。『おおきななぐ』とか『かばくん』の時代の本です。ほかに『しょうぼうじどうしゃじぶた』などちょうど作ったばかりでした。それらを展示すると、多くの編集者が見に来てくれました。日本が初めて参加したということが彼らの目を引いたのでしょうし、日本で編集、出版された絵本がある！ということが驚きだったようです。敗戦国日本にこんな良質な絵本を作ることができるとは思っていませんでした。何人もの編集者にそれを指摘されました。

ちょっと反発を覚えたので、私は「日本では12世紀から絵で物語を表現するという非常にすぐれた文化があるのです」と言いました。12世紀といえばヨーロッパはまだ暗黒時代ですが、日本には「絵巻」があったのです。私が中学生の時、京都博物館で「絵巻」を見て非常に感激した覚えがあります。『鳥獣戯画』などは、色がついていないのにこんなに多くの物語を語っているとびっくりしました。『信貴山縁起絵巻』も構図が見事です。それらを体験していたものですから威張って「12世紀からです」と言ったのですが、なかなか納得してもらえませんでした。ですから翌年は『鳥獣戯画』のレプリカを持って行きました。そしてお見せすると皆さんが「これがほんとうに12世紀の作品ですか？」と本当にびっくりなさいました。そして日本の物語絵の歴史、美術の歴史を納得してくださいました。その後、室町後期から近世はじめにかけて流行した「奈良絵本」という極彩色の手作りの絵本、また「上方本」という京都、大阪地方で作られた素晴らしい版本があります。もちろん江戸時代の「浮世絵」があります。この素晴らしい歴史を子どもたちに伝えていかなければな

らないというのが私の夢だったので。

昨年、外務省から頼まれてヨーロッパの大学で講演しましたが、私が頼まれたのには理由があるのです。昨今、ヨーロッパでは「日本人はどうしてこんな上手にアニメーションを作るのか」と不思議がられています。特にフランスではアニメーションが盛んですが、日本のアニメーションとは違うのです。そこでフランス人は日本には何か独特の伝統があるに違いないと感じたのです。アニメーションだけではなく漫画も同じです。また絵本もそうです。日本人の作る絵本は何か独特の伝統、文化があるらしい、それを説明、講義してくれと頼まれたのです。

☆読み書きそろばんの文化

その時はスペイン、ポルトガル、フランスで講演したのですが、そのとき日本の12世紀からの、物語を絵にする伝統を説明しました。講演の中でもうひとつ私が強調して説明したことがあります。それは当時の庶民の文化の高さです。当時、相当多くの木版の読み物が出版され、出回っていたということは多くの読者がいたということです。読者がいなければ出版などできるはずはありません。たとえば1808年頃、江戸の町は百万都市でした。「世界でも珍しいほど治安の良い百万都市——」とヨーロッパの文献にも書いてあります。その江戸の町に656軒の貸し本屋があったという記録があります。すごい数だと思いませんか？今の東京には何軒あるでしょうか。貸し本屋ですから庶民が本を読んでいたということです。武士や貴族は本が読みたければ買って読むでしょうから、貸し本屋で借りるのは庶民です。庶民のなかでも主として商人の家庭では読み書きを重要視したようです。商家では一般に「読み書きそろばん」をととても大切に考えました。商売をするのですからそろばん、つまり計算が大切なのは当然でしょう。その他、読み書きは大福帳を書いたり読んだりするのに必要だったです。その「読み書きそろばん」を教えるところが寺子屋です。寺子屋に関する文献には、そこで教える先生の四人に一人、あるいは三人に一人は女性だったと書いてあります。奉公に行った先で自分も読み書きそろばんができるようになり、やがて宿下がりをして帰ってきて寺子屋の先生をしたのではないかと思います。

もうひとつおもしろい記録はロンドン大学のドーア博士が書いています。1868年、明治維新の年ですが、その年の日本の6歳から13歳の子どもの就学率についての記述があります。それによりますと、男の子は43%、女の子は10%の就学率だったということです。これは世界最高だそうです。日本はそういう高いレベルの文化を持っていたのです。ですか

らこそ明治維新に非常に短期間に近代国家を形成することができたのです。そして義務教育制度を全国にすばやく広げることもできました。

☆言葉離れ

歴史はそのような積み重ねなのです。その積み重ねが戦後、あるところは発達したのですがあるところは停滞してしまい、またあるところは落ちていきました。最近の本離れ、活字離れということがよく言われます。私はこの本離れ、活字離れは言葉離れだと思っています。

今や、日本語の力が非常に弱くなっています。さきほど言いました昨年のヨーロッパでの講演の際、パリでのことでしたが、講演のあと、質疑応答の時間に中年のご婦人が「日本の高校生は本を読まないそうですが、どうしてですか」と質問されました。ヨーロッパの人はよく知っているのです。この方はきっと2000年のOECDの読解力の調査の結果をご存じなのでしょう。また昨年の暮れに日本の15歳の少年少女の読解力がまた落ちたといって新聞が大騒ぎをしましたが、2000年、先進国32カ国の15歳の少年少女を対象にアンケートをして調べたのが第1回でした。その時は読解力で日本は8位だったのでしょうか。その時も今もフィンランドが1位というのは変わりません。そして日本は今回14位に落ちたのです。そのアンケートの中に「あなたは喜びや楽しみを得るために、言い換えれば趣味として、読書をしますか」というような項目がありました。その項目に対して「読書をする」と答えた日本の子どものパーセンテージは、何と32位！最下位だったのです。日本の高校生は本を読まない！これが世界中に知れ渡っているのです。

これに対して私は丁寧に答えましたが、要するに赤ちゃんのときからの耳からの言葉の体験、それも機械を通してでなく、人間の言葉として聴く、話すという体験が基本的に一番大切であるという認識がなおざりにされているのです。テレビがほとんどこの家庭にもありますが、テレビから出てくる日本語も確かに日本語なのですが、機械を一度通しているために、人間の言葉ではなくなっているのです。私はそこを峻別していますが、人間の言葉なら気持ちが通い合うのです。テレビから出てくる言葉では話している人の気持ちがじゅうぶんに伝わりません。話し手は聴き手がいて初めてよい話し手になれるからです。

機械語という言葉のスイスの哲学者マックス・ピカートが使っています。また「言葉は沈黙の深みから出てくる」ということをその著書『沈黙の世界』で言っています。現在は騒音語の時代として機械音を非常に厳しく人間の言葉と区別しています。機械の言葉は人間の心を育てませ

ん。もちろんまったく無意味ではありません。私はテレビが好きですが、テレビの言葉は一对一で話し合ったり、または今のように私と皆さんのような関係における言葉とはまったく違うのです。私は今、一方的に話しているように見えますが、皆さんお一人お一人の反応が何となく伝わってそれをひしひしと感じながら話しているのです。テレビで話す人にはそれは感じられないはずです。話し言葉には相手があります。相手の気持ちを感じて次の言葉は発せられるのです。相手の言葉によって私たちはその気持ちを受け取るのです。言葉は気持ちを運ぶものなのです。これが言葉の大切な力なのです。

☆言葉の体験

活字になっているものを読んで、その書き手の気持ちを感じることができるには相当な言葉の体験を踏まえていないとできないのです。今、それがとても弱くなっています。私はもう一度、赤ちゃんの時から言葉の体験を考え直さなければならない時が来ていると思います。そうしないとこの問題は解決しません。

それを強く感じたのは一昨年、中学生が4歳の男の子を殺したという事件がありました。事件の報道を聞いて、私はびっくりすると同時に「さもあんな」と思いました。この加害者の男の子は小さい時に自分の顔をちゃんと見て、自分に語りかけてくれる、本を読んでくれるという体験が貧しかったのではないかと強く思いました。言葉を通して気持ちが通い合うという経験が豊かにありますと、他人の気持ちが分かるのです。お互いの言葉が通じないということは気持ちが通じません。気持ちが通じないということはほとんど人間関係が持てないということです。そうなりますと人間は恐いもの知らずになってしまいます。

相手の気持ちがわからないということは何でもやれるということです。私は事件の中学生の性格や生い立ちに関心がありましたが、三日ほどして新しいニュースが入りました。あの子は学校の成績が良いというニュースに、私は妙に納得しました。学校の成績が良いということはその子の頭の中には知識や情報は一杯詰まっているのです。だから試験をすれば答えられ成績は良いのです。でも頭の中と対照的に心の中の言葉は空っぽだったのではないのでしょうか。

これからはそういう子が増えていくのではないかと危惧していましたら、去年、また小学六年生がクラスメイトを殺してしまう事件が起こりました。そのとき私はすぐ長崎県の教育委員会の知人に事件の詳細を教えてほしいと頼みました。そして受け取りました。そこには学校でので

きごと、家庭での様子、専門家の意見、家庭裁判所での判断の結果、教育委員会の見解などがまとめられていました。それによりますと加害者の女の子は小説を書いていたそうです。そのホラー小説は小学生にしてはよいできばえです。小学生でそんな小説を書いているのですから、これはもうかなり頭の良い子どもです。父親はあの子をととても誉めています。学校の先生も良い子だと評価しています。でもあんな事件が起きてしまいました。あの子の内面の世界は誰も知らなかったのです。これが現代の私たちの普通の人間関係です。

私たちの周囲には毎日毎日ほんとうに色々な事件が起こりますが、一体、何が原因なのでしょう。一つ一つ違うと思いますが、根本的な原因の一つは言葉だと思います。言葉の体験の貧しさから来るのではないかと思うのです。気持ちの通い合う言葉を赤ちゃんの時からずっと聴くことによって、この人は自分を理解してくれる人、信頼に足る人だと判断して安心するという体験が非常に重要であるということをもう一度考えていかなくてはなりません。

☆文字の向こうにある世界

そしてその豊かな体験の上に、今度は自分で読むことによって言葉の世界に身を置く、それが読書ということです。字が読めれば本を読むことは確かにできます。日本の成人の識字率は97.8%でしょうか、ほとんどの人が字は読めるのです。これは世界でも最高の水準です。ところが日本の成人の読書率はだいたい40%です。あとの60%の日本人も何も読まないわけではありません。日本の大人は字が読めますから皆さん何か読んでいます。それは新聞や週刊誌だったり、仕事をするためのマニュアルだったり、何かを調べるために読むこともあるでしょう。文字になっているものは何でも読めるのです。字を読み、言葉を読み、文章を読むところまでは誰でもします。そこまでは字を読む技術でできるのです。でもそれはたいてい表面を撫でているような読み方です。これは読書ではありません。でも最近はそういう読み方しかできないような本も多くなりました。小説でさえもストーリーしかないような薄っぺらなものもあります。

そういう表面を撫でるような読み方ではなく、その先へたどりつのがほんとうの読書なのです。文章を読んでその文章が語っている奥へ深く入っていくと、書き手、著者の世界にたどり着きます。そこで著者がほんとうは何が言いたいのか、描いているイメージ、考え方、哲学、思想まで感じ取ること、それが読書なのです。言葉の世界にどれくらい深

く入れるかということです。文字の向こうに深い広い世界、その作者の全存在を賭けたような世界があって、そこに足を踏み入れるのが読書なのです。子どもでも、そして子どもならこそ、その世界に入ることはできるのです。子どもでもその年齢にふさわしい豊かな経験をもっていけばじゅうぶん入っていけるのです。

☆五感でお母さんを知る

赤ちゃんは生まれてすぐお母さんの声を認識します。言葉はもちろんわかりませんが、生まれる前から聴いていた声です。お母さんが赤ちゃんを抱っこしますと赤ちゃんの頭がお母さんの胸のところにきます。そうすると心臓の鼓動が伝わって、これも赤ちゃんは生まれる前から知っている感覚です。それは「この人といれば安心」という感覚です。その胸に、その腕に抱かれていて、その声のする方を見るとお母さんの目があります。お母さんの匂いがします。おっぱいとお母さんの味がします。私の母は昭和初期にはめずらしかったかもしれませんが、毎晩のようにふとんに入ってから絵本を読んでくれました。そのときの匂いは今でも覚えています。

これは五感です。聴覚、視覚、触覚、嗅覚、味覚ですね。人間は生まれてすぐにそれらが発達していきます。これが言葉の原点です。これらの感覚に鋭敏になって心が生き生きと動くと言葉もだんだん自分のものとするのができるのです。それを今の乳幼児は体験しているのでしょうか。

私はそれを考えていると思ひ出すことがあります。皆さんは子守唄を歌うことができますか。私は歌えます。私は思いがけない時に子守唄を歌えることがわかって、我ながら驚きました。最初の子どもが生まれて二ヶ月目のある日曜日、子どもが寝ている傍で私は本を読んでいました。つれあいは子どもがおとなしくしていたので台所に行っていました。すると子どもがむずかりそうになりました。子どもは今まで傍らにいた母親の気配がなくなったことを感じたらしいのです。私はあわてて抱っこしました。そのくらいのことは新米のオヤジでもできます。そしてその子どもを抱っこして私はなんと子守唄を歌いだしたのです。まったく無意識です。あとでつれあいに「子守唄なんてよく知っていたわね」と言われました。ねんねんころりよ〜という子守唄です。私は子守唄を習ったこともないし、自分が赤ちゃんだったときに歌ってもらったという記憶もまったくありません。ただ三歳年下の弟に母親が歌っていたのを記憶していただけです。だからたぶん私に対しても母親は歌ってくれた

のでしょうか。結構長いフレーズを歌えたので自分でもびっくりしました。あとで調べてみるとかなり正確に歌えていたのです。

自分で意識していなくても言葉はこんなに深いところで残っているのだということです。それは言葉だけの力ではありません。母親が歌ってくれたときの私の五感が働いていたのでしょうか。そして言葉を全身全霊で受け止めて、しっかり自分のものにしていったのでしょうか。

これは私が言葉に目覚めたひとつの出来事でした。皆さんは言葉を誰から貰われましたか。皆さんに言葉をくださったのは誰ですか。だいたいはお母さんだろうと思います。もちろんお父さんも少しは役割があるのですよ、私も父親の一人としてそう思いたいのですが…。私自身も言葉を母親から貰いました。私たちは一番大切なものを親から貰います。かけがえのないいのちを貰ったのです。そして同時にそのいのちの器である身体を貰ったのです。それが誕生ということです。身体はいのちの器です。いのちがなくなると身体もなくなります。身体がなくなるといのちもなくなります。そしてそのいのちを支えるものは言葉だと思いません。言葉はいのちを支える力をもっているものなのです。

☆母語

小淵恵三さんが総理大臣だったとき一年間毎月、首相官邸で「子どもの世界と未来を考える懇談会」が開かれ、いろいろな分野から人が集まって自由に話をしたのですが、出版界から私が呼ばれました。座長は成城学園の本間長世先生でしたし、他に河合隼雄先生、資生堂の福原義春さん、マラソンの有森裕子さんなど多彩な顔ぶれでした。あるとき文部省の方が「今日は最初に国語教育についての問題提起をします」と言われたので、私は「まず、国語という言葉をやめてはいかがでしょうか」と提案しました。恐い顔で睨まれ、「どうして国語がいけないのですか」と言われましたので、「私は国から言葉をいただいた覚えはありません」と答えました。隣で河合先生が笑っていらっしやいました。私は国からではなく母親から言葉を貰いました。国語ではなく母語です。

母親からいのちを貰い、身体を貰い、言葉を貰ったのです。子どもたちがそれを実感してくれれば、きっといろいろな問題が明らかになり、解決できる問題もたくさん出てくるでしょう。教えられて知識として理解するのではなく実感として、どこかでそれを捉えてくれたら、子どもの生き方についての問題は明るい方に向かうのではないかと私は思っています。

また私は「国語という教科をやめて、言葉という教科にされてはどう

ですか」と提言しました。戦後すぐそれをすべきだったのに、明治維新以来の国語という思想にずっと引っ張られて、いまだにその枠の中で考えています。そうではなくて言葉というものは、人間にとって自分にとってどういうものなのかということ、子どもたちに小さい時からはっきりと捉えさせてほしいと思うのです。

日本人は日本語を使います。韓国、朝鮮の人はハングルをアイヌの人はアイヌ語を使います。中国では56の民族がいて言葉は複雑に分かれています。フィリピンでは多くの島でみんな言葉が違うと言ってもいいくらいたくさんあります…そんな風に世界には非常にたくさん言葉があります。そのなかの一つが日本語だということをしっかり認識していただきたいと思うのです。そうしなければ国際性は育たないではありませんか。そのとき私はそれを力説いたしました。

自分の言葉がどうやって発達してきたかをもう一度考えていただきたいと思います。私は幼児期に言葉を教えてもらったことはありません。もちろん小学校に行くようになってからは教えられたこともあります、学校で教えられなくても聞いたり話したりできるようになっていたのです。大人が使っているのを聞いて覚えていったのです。言葉は伝承です。大人の言葉が子どもの言葉になるのですから、大人が日常生活で、余程豊かな言葉、日本語を使っていなければ子どもたちの言葉は豊かになりません。豊かな言葉ですべてのこと、すべてのものを伝える、これが大人の役割です。

朝、挨拶をする時、ある人には「おはようございます」といい、またある人には「おはよう」と言う、それを子どもは聞いていて、同じ朝の挨拶でも人によって言葉は変わるのだということを知るので。私は今でも「子どもに本を読んでやる」と言います。「読んであげる」とは言わないのです。私は子どもに丁寧語を使うということのない時代の人間ですから。みなさんは「読んであげる」とおっしゃる方が多いでしょうね。私は相手が目上の方であれば「読んで差し上げる」と言うかもしれません。あるいは「読ませていただきます」という謙譲語を使うこともあるでしょう。そのような言葉の分類は学校に行ってから習いました。しかし学校に行く前からどういう時にどういう言葉を使うかはなんとなく知っていました。母親が電話をしているとその言葉で相手が偉い人なんだなとか、友達と話しているのだとかはすぐにわかりました。そのように大人が朝から晩まで使っている言葉を子どもはどんどん吸収します。

そこに今はテレビがあります。これは大きな問題です。もちろんテレビが悪いわけではありません。テレビが入ってくればくるほど、大人は

もっと言葉に気をつけて、豊かな言葉を使わなくてはならないのです。

そこに言葉の素晴らしい世界を持っている本が登場するのです。本の中の言葉は日常生活に使っている言葉とは違います。言葉の選び方、組み立て方も違います。言葉の専門家が選び抜いて書いたのですから、その言葉によって導かれるものは日常とは違うのです。日常の言葉をじゅうぶんに体験した上で、今度は本の中の言葉を積み重ねていくと初めて読書をする実力がついてくるのです。

☆『にほんご』

25年ほど前、私はその頃小学校一年生の国語の教科書が何となく消化不良といえますか、欲求不満といえますか、これでは言葉の世界を子どもに伝えられないと思っていました。たまたま同じように思っていた三人の方と一緒に、『にほんご』という本を出しました。今でも大学のテキストに使ってくださっているところもあってよく読まれているようです。私たちは言葉が子どもにちゃんと伝わるような本を作ろうとしたのです。その一人は画家で絵本作家の安野光雅さんです。私は安野さんの言葉の説得力がたいへん見事だということはすでに体験していました。たまたま私の子どもたちの先生でしたから…。子どもが三年生くらいのときに造形と美術の先生でした。子どもに教えていらっしやるのを拝見して、とてもユーモアがあって、しかも論理的に教えられているのに感心しました。言葉が素直に子どもの心に入っていくという印象を受けました。ですから安野先生が学校の先生を辞められるのを待って、絵本の仕事に引っ張り込んだのです。あとのお二方は大岡信さんと谷川俊太郎さんです。この本は最初に《おはよう・こんにちは》という挨拶が出てきます。

《おはよう・こんにちは》

わたし かずこ
ないたり ほえたり さえずったり、
こえをだす いきものは、
たくさんいるね。
けれど ことばを
はなすことの できるのは、
ひとだけだ。
かずこも
あかちゃんのころは、
ことばを はなせなかった。
でも いまはもう

はなせる。

あさがくると みんな
「おはよう」って いうね。
「おはよう」って いうのは、
きもちが いいな。
ひとの「おはよう」と
おうむの「おはよう」は
おんなじかな？
ちがうかな？

考えてみてください。人間の「おはよう」とオウムの「おはよう」はどこが同じでどこが違うのでしょうか。これは言葉を考える上でとても大切なことです。皆さんはオウムの「おはよう」を聞いたことがありますか。子どもと一緒に考えてみるとよいでしょう。子どもがわからなかったらわからないままにしておきましょう。子どもは成長の段階でいつか違うことに気がつきます。そういう問題提起と理解の仕方をしておくということも大切なのです。

《きもち》

かずこが ないている。
どうして ないているのだろう。
あきらが、おこっている。
なぜ おこっているのだろう。
ひとは ことばを つかって、
じぶんの きもちを
ほかの ひとに つたえる。
ひとは ことばの おかげで、
ほかの ひとの きもちを
じぶんの きもちのように かんじる。
ことばには いつも きもちが かくれている。
けれど きもちが あんまり はげしくなると
ひとは それを ことばに できなくなることもある。
わらったり ないたり、
ひとりぼっちで だまりこんだり、
ぼうりよくを ふるったり ……
そんなとき、ことばは こころのおくふかく かくれている。

「人は言葉のお陰で、他の人の気持ちを自分の気持ちのように感じる。言葉にはいつも気持ちがかくれている。」これはとても大切なことです。「けれど気持ちがあまり激しくなると人はそれを言葉にできなくなることもある。笑ったり泣いたりひとりぼっちで黙りこんだり暴力をふるったり、そんなとき、言葉は心の奥深く隠れている。」

——人間の「身体」と「言葉」の問題とか「文字」と「言葉」の関係とかありとあらゆる角度から言葉の問題をとりあげて考えています。文章は谷川さんです。ぜひ一度読んでいただきたいと思います。そして自分の使っている言葉がどういうところがぴったり当てはまっていってどういうところがはずれているか、そして言葉のどこに気がついていないかということをお考えいただきたいと思います。

この本が出版されましたとき東京大学の言語学の国広哲弥先生が岩波の『思想』という雑誌に長文の書評を書いてくださったのですが、それを読んで私たちはびっくりしました。「この本の中に世界の言語学の問題は全部入っている」と書かれていました。私たちは誰一人言語学者ではありませんでしたが、よく考え、筋道をたて、整理してちゃんとまとめると学問というものに重なってくるのだと思った次第です。

子どもたちが社会に出ていくとき、豊かな言葉の世界を持っていませんと社会生活の中で非常に苦労すると思います。

☆耳からの経験を目からの経験へ

言葉は目に見えません。私たちは字が読めるものですから言葉が見えるものと錯覚することがあります。私が今、話しているのが言葉です。これは目に見えません。でも私と皆さんの間には言葉は厳然とあるのです。

「人間にとって大切なものは目に見えない」というのは星の王子さまの口癖ですが、ほんとうにそうですね。時計があるから見えるような気がしますが時間も見えません。いのちも見えません。愛も見えません。ほんとうにたくさんの大切なものが目に見えません。言葉も見えない大切なもののひとつです。

人間は言葉を豊かに体験すると、言葉によって思い描くことができるようになるのです。想像して実感できるわけです。そこに素晴らしい世界が広がってきます。読書とはそういうことなのです。目に見えないものを自分で見えるようにすることなのです。ですからまだ字が読めない頃に大人によく話しかけられたり、絵本や物語を読んでもらったりし

て、耳からの言葉の体験が豊かに与えられた子どもは読書が自然にできるようになるのです。

子どもに絵本を読んでやっていると、子どもは夢中になってその世界に入り込むのがよくわかります。本を読んでやっていて、最後まで読んで「おしまい！」と言うと子どもはその世界から出て行き、その世界の心地よさに「もう一回！」とか「もう一冊！」と要求します。そしてまた別の言葉の世界に入り込むのです。

子どもは耳から聴くことによって、もちろん絵からの豊かなサポートがありますが、それによって自由に言葉の世界に出たり入ったりできるのです。二歳から四歳が一番できます。それがいかに楽しいか、悲しいか、怖いかを体験している子どもが、字を読むという素晴らしい技術をマスターしたときに、今度は自分で文字を読んで言葉の世界に入ります。乳児から言葉に豊かに出会っていた子どもは、今まで耳から入っていたものを目から、とチャンネルを切り替えるだけです。耳からの体験が貧しいと、字は読めるのですが言葉の世界に入ることはできません。大人から見ると読んでいるように見えるのですが、本人も読んでいると思っているのですが、その世界に入り込めていないのです。それでは読書をしているとは言えないのです。

☆声の文化

読書の基礎は声であるところの言葉です。声の文化なのです。人類の言葉の「聞く話す」ということの発祥は今から六万年くらい前だと言われていますが、それがずっと声の文化としてつながり、今から六千年から四千年前に文字が発明され、「読む書く」という文字の文化を作ってきました。もともとは声の文化だったのです。ですから声の文化が体験されていないと文字の文化が生きてこないわけです。

さきほど二歳から四歳くらいが大切な時期と言いましたが、この時期の子どもが持っている言葉に対する感受性はすごいものがあります。だいたいその頃は絵本を読んでもらっている時期です。子どもはその頃「好きな絵本」ができます。それを繰り返し繰り返し読ませます。私は最初の子どもが一歳くらいの時から読んでやっていました。正確に言うと読まされていました。子どもに読んでやっていて、ページをめくると絵が変わる——、最初はこれがおもしろかったようでした。最初はもちろん意味は分からないでしょう。でも一歳の子どもが絵本に興味をもっていることにびっくりしました。まあ、編集者のオヤジとしては本に興味を持ってきてくれて嬉しかったのですが。膝の上に乗せて読んでやると最後ま

でおとなしく聴いているのです。それは岩波書店の『はなのすきなうし』だったと思いますが、あれは白黒の絵です。もちろん話の筋はその子どもには分からないでしょう。膝に乗せているのでわかるのですが、非常に緊張しているのです。そして最後まで聴いていました。ひょっとしたら子ども心に恐縮していたのかもしれませんがね。生まれて初めて親父が膝に抱っこして自分に語りかけてくれたのですから。これはもうすごい体験だったと思うのです。それが強く印象に残ったのかどうかはわかりませんが、翌日の夕方、私が会社から帰ってきますと、そのよちよち歩きの子どもがその絵本をもって玄関にやってきたのです。そしてその本を差し出すのです。「読め」ということでしょうか。読んでやると、一歳の子どもでもちゃんと最後まで聴いているのです。それが私が子どもに本を読んでやるようになったきっかけです。それからもう次から次へと本を持ってくるので読んでやりました。どれくらい理解していたかなんということは私の知ったことではありません。ただ「読め」と子どもが命令するのに父親は従っていただけです。母親もまた読まされていました。そうするうちに、いつの間にか自分で本を読めるようになりました。私は一度も字を教えたことはなかったのですが、三人の子どもは皆、小学校に行く前から本を読んでいた。言葉が大好きになりますと、大人が文字を読んでいることは分かって、自分で読めればいいのにとと思うのでしょうか。そうすると文字に興味をもって読めるようになるのです。

子どもを言葉好きにすることが大切です。二歳から四歳は自分の好きな絵本を完璧に覚えてしまいます。覚えさせようとするとたいい失敗します。繰り返し繰り返し同じ本を読まされるのは辛いですが、でもそれをしてしまうと子どもは言葉をまるで全部食べてしまうように取り込んでしまうのです。そうするとそれはいつか口から出てきます。

私がよく例に引きますのは歌人、俵万智さんですが、俵さんは三歳のときに『三びきのやぎのがらがらどん』が全部正確に言えたと言ったエッセーに書いていらっしゃいました。私は俵さんのことを『サラダ記念日』が出た時から、若くして非常に言葉の使い方が豊かな人だと思っていたのです。あのような力は中学高校大学で勉強しても身につくものではありません。今の国語教育では小学校でもダメでしょう。小学校も一、二年生、それより幼児期に何か特別な言葉の体験をされていると思っていましたら、『リンゴの涙』というエッセーに最初の読書体験が書いてあって、自分が最初に手にした本は『三びきのやぎのがらがらどん』で、二歳のときから一年間、母に一日に何度も何度も読ませていたと書いておられました。私はお母さんに感心しました。お母さんの大変さはほんとうに頭

の下がる思いです。そして三歳のある日その絵を見ていたら言葉が自然に出てきたと言うのです。

こういう人は他にもいらっしゃいます。私も最初のところは言えますよ。「むかしさんびきのやぎがいましたなまえはどれもがらがらどんといいましたあるとき…」。でもこれは覚えようとして覚えたのですからこの辺からはあやしくなります。ところが俵さんは最後の「チョコキン、パチン、ストン。はなしはおしまい。」まで、全部言えたというのです。それが録音されていて一言半句間違っていなかったというのです。録音なさったご両親はそういうことに関心があったのでしょうか。俵さんは「幼児の記憶力というのは大したものだ」と書かれていましたが、これは単に記憶力というようなものではありません。彼女にとってお母さんが読んでくださる『三びきのやぎのがらがらどん』を聴くことがたいへんな喜びだったのです。何度も聴いてその喜びが確実に心に積み重ねられます。ですからそれが口から出る時はただ言葉を言うのではなく、喜びがため息のように出るので。これは子どもに備えられたもので、大人は気づいていません。これは字が読めるようになるとまた少し変わってくるのです。もちろん字を読めるようになってから覚えて、全部言える子どももいますが、耳から聞いて、それを食べるように心に取り込んで言えるというのとは少し違うのです。字が読めるようになる前に味わった言葉の喜び、言葉の力は想像以上に大きいのです。

先日、旭川のあるお母さんから二歳の女の子に毎晩ふとんのなかで絵本を読みますというお手紙をいただきました。ある晩いつものように読んでやっていたら自分の方が寝てしまったというのです。寝かせるために読んでいる方が寝てしまうのというのはよく分かります。私の母もそうでした。よく覚えています。だんだん声が小さくなってパタリとやむと今度は寝息が聞こえるのです。旭川のお母さんもそうだったので。そしてその二歳の子どもが寝てしまったお母さんに代って、最後まで、まるで読むように話したというのです。お母さんは寝てしまってわからなかったのですが、お父さんが聞いていて驚いて、翌朝そのことをお母さんに話されたのです。お母さんも驚いて、喜んで私にお便りくださったわけですが、私は驚きませんでした。二歳でもじゅうぶんにそれはできます。そういう子どもはたくさんいます。そういうとき「わが子は天才か！」と親は驚いて舞い上がるのですが、それは普通のことです。ただ、それまでに両親や周囲の人々からの言葉のよい体験がされていなければなりません。

☆素晴らしい日本語

そのときに絵本の文体の質が問われるのです。子どもたちがすっかり覚えてしまう絵本は文体の質が高いのです。素晴らしい日本語なのです。北欧民話『三びきのやぎのがらがらどん』の日本語訳をしてくださった瀬田貞二さんは、そういうすばらしい日本語の使い手です。瀬田さんは日本の古典に精通していて、特に俳人中村草田男の親友で、ご自身も俳句がお上手です。私は瀬田さんに多くの翻訳や創作をお願いしてきました。『三びきのやぎのがらがらどん』はアメリカのマーシャ・ブラウンの作品ですが、瀬田さんに日本語にさせていただくと、やはり五音と七音を中心にすばらしい調べの文章になります。日本語独特の調べです。それに子どもはすぐに乗るのです。

マーシャ・ブラウンさんは二度ほど来日されたことがあって、そのとき親しくお話ししました。私は彼女から「どうして日本の子どもはこのノールウェイのお話がよくわかるのでしょうか。そしてどうして好きなのでしょうか」と聞かれました。アメリカより日本の読者のほうが多いそうです。その時は「日本の子どもはセンスがよいからです」などといったお答えしかできませんでしたが、よく考えて、答えは出ました。「日本語」です。抜群に日本語がいいのです。日本語が良いために子どもの心に素直に届くのです。それが売り上げ部数に表れています。

1974年、新潮社から出された『日本語のために』で日本語にきびしい丸谷才一さんも瀬田さんの文章はほめていらっしゃいました。その頃、私は編集者として日本語について深く考えていました。そのなかに「絵本」のことが書いてありました。当時、作家や学者で絵本を取り上げる人はめったにいませんでした。私が絵本の編集者だということちょっと蔑んだように見る人さえいました。ところが丸谷さんは毎月、お子さんに絵本を選んで読んでやっているとことでした。そして気に入らない文章があると朱をいれて読んでいるというのです。恐れ入ると同時に感心しました。私が編集していた『こどものとも』も直されていました。「まったくなあ」という気がしましたが、そんなにしてまで読んでくださっている人がいるというのは感謝でしたし、また励まされました。ところが一冊だけ朱を入れる必要がまったくない『こどものとも』があったというのです。それが瀬田貞二のロシア民話『おだんごばん』であると書いていらっしゃいました。私は丸谷さんはさすがだと思いました。朱を入れることなく、お子さんに読んでやって、お子さんはすんなり受け入れられたことでしょう。それを丸谷さんも実感されたことでしょう。

☆絵本の絵

絵についてはもうお話する時間があまりありませんが、手短かに言いますと、絵が物語を語る条件は線と形と構図、この三つです。色ではありません。色彩は物語をダメにすることさえあります。線と形と構図、そしてその連続性と変化、そして余白。これがどれくらい雄弁か！『スーホの白い馬』などの赤羽末吉先生はほんとうに見事です。ヨーロッパでは『グリム童話』を書いているフェリクス・ホフマンです。ホフマンさんは「私の余白の使い方は東洋の絵に習ったのです」とおっしゃっていました。余白は物語を非常に豊かにします。色は上手に使わないとその物語の世界を弱めてしまうかもしくはダメにしてしまいます。しかしびたっと見事に色が使っていると物語の世界が膨らみます。線と形と構図と言え、先ほど言いましたが、日本には『鳥獣戯画』があります。色はありませんが見事な物語を語っています。

☆あそび

子どもが豊かな言葉の体験をするのに大切なことに「遊び」があります。本を読む前に遊びをしていないといけません。一人遊びも大切ですが、集団で遊ぶのはそこに言葉が渦のようにあります。いろいろな言葉が飛び交っています。口に出さない言葉も飛び交っているのです。言葉がなければ遊べません。言葉が伝わらなければ気持ちが通いません。気持ちが通わなければ遊びはできません。そのなかで子どもは生き生きとした言葉の使い方を知るわけです。遊びはほんとうに大切なのに、昨今、子どもが遊ばなくなりました。特に外で遊ばなくなりました。これは言葉が貧しくなっている一つの原因です。

私は家が京都の鴨川の傍でしたので一年中鴨川で遊んでいました。あぶないこともたくさんしましたが、ほんとうにいろいろな経験をしました。一年中、鴨川とつきあっていましたから、夏、川に手足を浸けて感じる気持ちよさ、冬の切れるような痛い冷たさ、その感触は忘れられないのです。それが物語などを読む場合、その理解を大いに助けるのです。冬の川の水の冷たさといえさぞかし冷たいだろうと確かに意味はわかるのですよ。それが経験をした者にはそれ以上に実感としてわかるのです。それがわかれば小説を読んでも深いところにまで入っていくことができます。実体験をしていると言葉のほんとうの世界が読み取れるのです。

この頃は鴨川で遊んでいる子どもを見ることは少なくなりました。あまり良い時代ではありませんね。

☆雨がしとしと…

子ども同士だけではなく、子どもと大人がいっしょに自然の中において、自然を体験するというのも大切です。子どもと散歩するとか山に登るとか海で泳ぐなどですね。

そうすると、とても難しいことが簡単に伝わるのですよ。これもまた私がよく例に引くのですが、日本語ではほんとうにいろいろな雨の降り方をあらわす言葉があって、デリケートな使い分けをします。それを若い人は意外に知らないのです。たとえば雨がしよぼしよぼ降る、しとしと降る、じとじと降る、これは全部違うのですが、その違いを子どもに説明することは難しいですね。また言葉をつくして説明されてもわかりにくいものです。でも雨がしとしと降っているときに、子どもに「雨がしとしと降っているね」と言えばすんなり納得できるのです。降っているさまを見る、雨音を聞く、匂いをかぐ、感じるなどという五感をフルに働かせた直接の体験が理解と納得になるのです。そういう日常生活を周りの大人は考えてやらなくてはなりません。

あるとき私の三歳になる孫と一緒にレストランで食事をしていました。すると突然「あっ、これはおとなのあじだ」と言ったのです。周りの大人は皆びっくりしました。甘いでもなく、辛いでもなく、美味しいでもなく、おとなのあじというのは微妙ですね。きっとそれまでに両親たちがその言葉を使っていたのでしょう。まさにぴったりの表現でした。また他の時に「これは地味ね」といったのにもびっくりしました。子どもはとてもよい耳をもっているのです。地獄耳です。へたなことは言えませんよ。

☆共に居る

絵本の意味というのはそれが必ず読書に直接結びついていくというものではありません。それでは絵本の最大の意味は、と聞かれれば、私が一番考えている絵本の意味、絵本の良い活かし方は「共に居る」ということです。私の編集方針がそうなのです。これは五十年間変えていません。絵本は子どもに読ませるものではなく、絵本は大人が子どもに読んでやる本です。大人が子どもに本を読んでやるとき、それは必ず「一緒に居るとき」です。読み手と聴き手はその時間と空間を共にすることによって、言葉の世界を、物語の世界を共通に体験するのです。共有するのです。これが絵本の意味です。絵本は作者のものではありません。著作権上は作者のものですが、絵本を読んでやるとき、絵本の世界は読み手のもの

です。読み手が場面をめくり、読み手の声で、読み手の言葉として子どもに伝わっていきます。子どもは「お母さんが読んでくれた『ぐりとぐら』」とか「お父さんが読んでくれた『おだんごぼん』」なのです。

私がよく学生に「『ぐりとぐら』って知ってる？」と尋ねますとたいいての学生が知っています。出版社としてはありがたいことです。でも「作者は誰？」と聞きますとかなりの学生が中川李枝子さんの名前を知りません。もちろんそれは重要なことではありません。でも「誰に読んでもらったの？」と聞きますとほとんど全員が答えることができます。お母さんや幼稚園や保育園の先生、中にはお父さん、図書館のお姉さんという人もいます。読んでくれた人のことはちゃんと覚えているのです。読んでくれた人の声でちゃんと残っているのです。これは一生忘れません。

私は北原白秋の詩を読みますと『コドモノクニ』という本で母親が読んでくれたのを今でもありありと思い出します。白秋の、あめあめ ふれふれ かあさんが——という詩がありますね。まだ曲がついていない頃で「…ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン…」というところ、私は外国語だと思っていました。いつか谷川俊太郎さんも白秋の日本語を絶賛されていましたが、あんな名作を小さな時に耳にできたことはほんとうに幸せでした。

現代、子どもに本を読んであげるお父さんは増えてきました。昨日もロンドン大学で経済学を教えておられる森島先生の奥さんと話しておりましたら、イギリスの中産階級で両親が子どもに本を読むのはすぐ当たり前のごとくです。日本ではそこまで行っていませんね。でも日本も昔に比べたら格段の進歩です。40年前子どもに本を読むお父さんはほとんどいませんでした。でも私のような父親も少しはいたのです。今、私の息子のような年で、子どもに本を読んでやっているという父親に読む理由を聞きますと、多くの父親は当たり前という顔で「自分が小さい時に読んでもらって楽しかったから」と答えます。こういう人はもう習慣になっています。絵本を読むということは生活習慣なのです。そういうお父さんはたいいて自分が子どもの頃、読んでもらった本をまた自分の子どもに読んでいます。自分が子どもの頃、読んでもらって楽しかった本を選んで読むとき、このお父さんは無意識のうちに昔の楽しさ、喜びがよみがえってきます。そしてその喜びは声の調子で子どもに伝わるのです。幼稚園、保育園の先生もそうです。やはりご自分の好きな本を読まれるときは声の調子が違います。ご本人は気がつかなくても気持ちがこもっていますから喜びが伝わるのです。そうするとそれを読んでもらった子どもはまたそれが好きになります。そして大人にな

りまた自分の子どもに読んでやるのです。これが絵本の伝承です。そのようにして百年間、読まれ続けた絵本があります。今も人気のある『ピーターラビットのおはなし』の初版がでたのは1902年でした。しかもあれはビクトリア朝の英語です。それをイギリスの人は現代英語に変えたりしないのです。古い英語を読んでも読み手の喜びはちゃんと聴き手に伝わっているのです。そして古い英語そのものも伝わっていくのです。あの難しいけれど、格調の高い英語を何代もの人々が語り伝えていくというのは素晴らしいことです。日本でも五十年伝えられている絵本はあります。そういうものをもう一度皆さんが読み直していただくと、これがそれほど読み続けられてきたのは言葉に力があるからだということがよくおわかりになると思います。

たとえば『ぐりとぐら』はどちらかといえば山脇百合子さんの絵が印象に残りますが、中川李枝子さんのテキストはとても意味のあるものです。日本の児童文学の流れを変えるような新しい文体です。それに気がついて出版したのですが、あのような文体は同じ中川さんの『いやいやえん』が出るまではなかったのです。そしてここに持ってきましたが『おおきなかぶ』ですが、内田莉莎子さんの翻訳の文章も見事です。さすが明治の文豪、内田魯安の孫だなあと思いました。ロシア語の音楽的な響きも見事に伝えられています。

絵本を手にとったらもちろん絵が先に目に入るでしょう。そしてストーリーを読むでしょう。そのときただ話の筋を追うのではなく文章を声に出して読んでください。黙読はだめです。ゆっくり音読をしてそれを自分の耳で聴いてください。そうすれば絵本の文章の良し悪しはかなり分かります。言葉が鍵なのです。

それらを考えながら絵本を選び、読んでくださるなら、子どもはそれを一生忘れません。

2005年11月9日 (水)
名古屋学院大学シティーカレッジ2005
特別講座「絵本のちから」
講師 松居 直

チャペルブックレットNo.12

2006年4月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部
〒480-1298
瀬戸市上品野町1350
TEL 0561-42-0348

印 刷 東洋印刷工業株式会社
